

見附市教育センターだより



〒954-0052

見附市学校町 2-7-9

電話/Fax 0258-62-2343

E-mail mrisen@mitsuke-ngt.ed.jp

令和3年1月22日 NO.10

伝承館・教育センター

手前は近所の「南天」



平均点は必要ですか？

見附市中学校校長会 会長 多田 茂

定期テストを返却している教室の黒板に「最高〇〇点 平均〇〇点」と書かれているのを見て、その直後の企画委員会で「平均点は必要ですか？」と検討をお願いしました。平均点は集団に準拠した評価の考え方ですが、未だに中学校では根強く残っています。

今年9月、OECDまたはEUに加盟する38の国々の子どもたちの幸福度を調べた調査で、日本は「精神的な幸福度」でワースト2位という結果をユニセフが発表しました。

「幸福学」の第一人者である慶應義塾大学大学院の前野隆司教授は、「海外の教育現場をいくつか見てきましたが、それらに比べると日本の学校は残念ながら『幸せ』ではないかもしれません。」と言っています。「日本は、人と比べてしまう傾向が強いと感じます。保護者は別の子の成績と我が子の成績を比べる。自治体は全国学力調査の結果を比べる。『うちの子は優しいからそれでいい』『我が県は、学力は低いけど自己肯定感が高いんだ』と、自分たちが

『幸せ』だったらそれでいいのです。人と比べる必要なんて全くありません。そもそもこれだけ価値観が多様な時代に、一つの規準だけで優劣、勝ち負けを比べることは無意味です。多様な人が多様な勝ち方をして、それぞれが『幸せ』であればそれでいいんですよ。」（『教職研修』2020年4月号）

学力が低くてよいわけではありません。他の児童生徒と比べての低さを問題とするのではなく、目標に達しないことが適切に評価され、その低さに対して学習と指導の改善が行われることに大きな意味があります。

中学校の出口には、入試という巨大で強力な集団に準拠した評価場面があります。それでも、教室では目標に準拠した評価の考え方が当然となり、「学習と指導と評価の一体化」が浸透していくことが、児童生徒の幸福度アップにつながっていくはずで、教室の黒板に書かれた最高点と平均点を見て、そんなことを考えていました。

巻頭写真に寄せて 「みつけ伝承館」は、魅力がいっぱいです。

大晦日から降り出した雪が、正月三が日も降り続き、新年は除雪のスタートでした。5日は寒い朝でしたが、陽が差しました。早めに出勤して、教育センター周辺(本所)の雪景色の撮影をしました。本所は比較的新しい住宅地です。庭木に雪吊り等をして雪に備えている家が多く、朝陽を浴び美しい姿を見せていました。そんな中、南天を植えている家がありました。以前は「難を転じる」という縁起の良い植物として、南天が植えている家をよく見かけましたが、最近では正月の「生け花」として、見ることの多い南天です。雪の中で寒さに耐え、赤い実を付けている南天から「コロナや寒さに負けるな」の元気をもらいました。さて、10分程散策をしたのですが、ベストショットは、勤務場所といえばよいのか「みつけ伝承館」です。真っ青な空に白い建物の伝承館が、陽を浴び眩しいほどの美しさです。(巻頭写真)「みつけ伝承館」が正式名称と思われていますが、正しくは「見附市民俗文化資料館」です。その名の通り、ここは見附の歴史や文化、生活様式等を丸ごと知ること(常設展)の出来る資料館です。さらに、年三回の企画展は、誠に中身の濃い見附の文化財の展示をしています。先週まで「麻と綿—みつけの織物—」と銘打った、見附の伝統産業である織物を展示していました。1月20日から「浅野家と釈迦塚新田」の展示が始まりました。伝承館のことを、小学生が昔の暮らしを学ぶ場と思われていませんか。先ず、大人の皆さんに見て頂きたいです。伝承館の魅力に、必ずはまります。



コラム 「 経験することが大切だ。経験を味わわなくてはならぬ 」

◇少し前になりますが、新潟日報窓欄にアップル社を創業したスティーブ・ジョブズの名言集を読み、感銘を受けた中学生の投稿文『名言多いアップル創業者』が載っていました。スティーブ・ジョブズたちによって作られたパソコンやスマートフォンは、今、私たちの生活に無くてはならないものです。そして、彼の洗練されたものづくりは「禅の背景による」とか、彼の生き方が「禅道そのものだった」と言われております。このジョブズに大きな影響を与えたのが、加茂市出身で、米国カリフォルニア州で活動した曹洞宗の僧侶、乙川弘文です。この乙川弘文の生涯を綴った本『宿無し弘文—スティーブ・ジョブズの禅僧』が今、話題になっていますが…。実はジョブズは、乙川弘文と出会う以前から禅を学んでいました。米国に、禅を伝えたのは鈴木大拙です。鈴木大拙は、石川県出身の僧侶で、明治後半に伝えました。この鈴木大拙と呼ばれて、一緒に活動したのが鈴木俊隆(子どもではなく弟子)です。大拙は講演活動や英語での執筆活動を、俊隆は米国人と座禅を組み、二人の鈴木が禅の布教活動をしたのです。乙川弘文は、この鈴木俊隆から米国に呼ばれた又弟子です。ですから、ジョブズが最初に禅を学んだのは、鈴木大拙の書籍と思われる。表題の「経験することが大切だ。経験を味わわなくてはならぬ」は、鈴木大拙の語った言葉です。



◇書物を読んだり映像を見たりして学ぶことは、とても大切です。講演を聞いたり教えてもらったりして学ぶことも大切です。ですが、実際に経験してみると、書物や講演で得た知識では得られないことや聞き学んだことと違うことを知ることができます。特に、子どもへの教育は、実際に経験しないと分からないことばかりです。そのうえ、目の前の子どもは、一人一人みな違うのです。この子どもたちを、十把一絡げにして捉えることはできないのです。

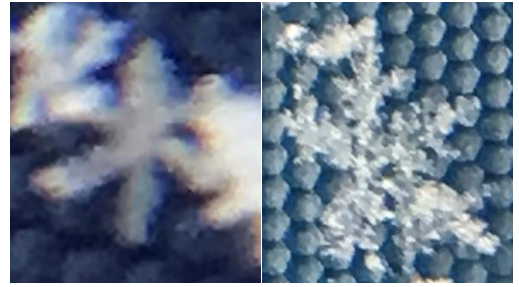
◇年度当初、初めて特別支援学級の担任や教育補助員になった先生が、困り感を持つ子どもを掴みきれず、授業が進められずに呆然と立ち尽くす姿に接しました。その後、学校に行く度に、先生方が休み時間、この子どもたちと一緒に遊んだり触れ合ったりする姿を見ました。12月に、「2回目の師がく」でこの学級を訪問し、子どもたちが穏やかな表情で、担任や教育補助員と真剣に学ぶ姿を目にしました。

子どもを理解する第一は、同じ目線で、一緒に過ごす経験をすることです。日々子どもは違います。子どもの成長は、スパイラルを描いて行われます。一緒に居て、子どもと経験を共有することで、子どもの小さな変化を見つけることができます。ぜひ、多くの関わる経験をして欲しいものです。(こ)

1月



科学教育部



【単元別研修会～小3 ものの重さを調べよう～】

《今月の2枚》 雪の結晶

小学校3年生では「ものの重さを調べる」学習があります。初めて「粒子」（化学単元）について学習します。小学校では「g（グラム）」を重さの単位として扱いますが、正しくは、質量として中学校で学習します。重さは、その物体にはたらく重力の大きさを表したものになります。ここでは、学習内容に合わせて「重さ」として記していきます。

児童は重さについて「重い」「軽い」といった、ものを比較する、実体験による感覚をもっています。科学的な力を身に付けていくために、感覚は非常に重要です。以下のような活動も、科学の力を身に付けるために実践できると面白いです。

【重さの計測挑戦！】
○粘土の塊があります。ここから 100g の量を取り出して計測してみましょう。

理科や算数などを中心に、さまざまな単位と数字を扱います。「100g」「1m」などの量や長さについて正しい捉えをもつことが、学習の理解を深めていくことにつながります。「100g」ピッタリ計れる感覚をもっている児童は、どれだけいるのでしょうか。「1m」の線を引くことはできるのでしょうか？私たちでも簡単ではありません。数字を扱うだけでなく、実体験を大切にしたいものです。これも、科学的な力につながります。

学習内容では「ものの置き方や形を変えても重さが変わらないこと」について学習します。教科書の実験では「もの」として粘土やアルミホイルなどの固体を使います。例えばこの「もの」をどう捉えるかによって、児童の考え方は異なる場合があります。右の図は、ペットボトルの写真です。一方には、水が満タンに入っています。もう一方には、半分程度の水の量です。満タンのペットボトルの置き方を変えて、はかりで重さを計測すると、「水が動いていないから変わらない」、半分の水量のペットボトルの置き方を変えると、「水が動くから重さが変わる」と考える児童がいます。水などの液体に対して、実体験を積んでいないと、一般化されない場合があります。単元の学習後に、この課題を考えてみると「粒子」の保存性について考えられます。



左：満タン 右：半分
※見えやすいように
水を着色しています



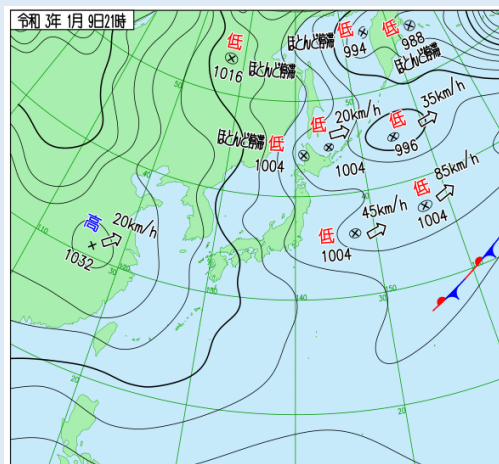
ペットボトルの置き方だけでなく、
水が動いても重さが変わらないこと
がわかります

科学の公園

史上最強クラスの寒波到来

今冬は、史上最強クラスの寒波到来により、日本海側を中心として大雪となっています。昨冬は、ほぼ雪も降らなかったのが大きな驚きがあります。これだけ年によって様子が異なるのは、温暖化が関わっていると考えられています。右の図は大雪となった1月9日の天気図です。典型的な「西高東低」の冬型の気圧配置となっていました。

下の表は年別の降雪量になります。観測地点は長岡です。1980年代は、大雪になっている年が何度かあり、1986年は降雪量1706(cm)です。しかし、1989年には降雪量94(cm)と非常に少ない年もあります。



1月9日 天気図 気象庁HPより

年	降雪の合計(cm)				
1981	867	1993	270	2007	104
1982	821	1994	387	2008	385
1983	762	1995	894	2009	302
1984	1219	1996	637	2010	599
1985	914	1997	311	2011	595
1986	1706	1998	472	2012	779
1987	1122	1999	539	2013	639
1988	771	2000	501	2014	439
1989	94	2001	679	2015	472
1990	357	2002	362	2016	334
1991	616	2003	486	2017	309
1992	385	2004	399	2018	608
1991	616	2005	699	2019	337
1992	385	2006	682	2020	95

全体の傾向を見てみると近年、大雪になることは少なくなり、1980年代と比較すると全体の積雪量も少し減っています。また、最深積雪の変化からみると、私たちが暮らす新潟を含む東日本日本海側（新潟県から福井県）と、西日本日本海側（滋賀県から熊本県）で降雪量の長期的な減少傾向がはっきりと見られますが、北日本日本海側（北海道から山形県）では大きな変化が見られないそうです。最深積雪は降雪量もちろんです。気温により融けやすいかどうかによって左右されます。北日本海側では雪が融けるまで気温が上がりにくいので、大きな変化がないと考えられます。

少しずつ冬の気温も上昇していますが、スーパーコンピューターで予測された結果では、今後、温暖化が続いていくと仮定しても、大雪の発生については大きく変化しないとなっています。今冬も、大雪が続くかもしれません。雪と共存する暮らしを考えていきたいものです。

(参考資料：気象庁HP)